

〔直訳〕

26 そして 彼は言っていた、
「そのようである 神の国は

ように 人が 種を投げる 土の上に、
27 そして 彼は眠る、

そして 彼は起きる 夜 そして 昼、

そして 種は 芽を出す、

そして それは伸びる、 彼が知らない間に。

28 おのずと 土は 実を結ぶ、

最初に 茎を、

次に 穂を、

次に いっぱいの 穀粒を 穂の中に。

29 だが実が許すとき、

すぐに 彼は遣わす 鎌を、

というのは 収穫が来ている。」

30 そして 彼は言っていた、

「どのように 私たちはたとえようか 神の国を、

あるいは どのようなたとえで、それを私たちは置こうか

31 からの種の粒のように、

それは 蒔かれるとき 土の上に、

より小さく あって どの種よりも 土の上の、

32 そして 蒔かれるとき、 生え出る

そして より大きくなる どの野菜よりも

そして 造る 大きな枝を、

その結果 できる その陰の下に 空の鳥が 住むことが。」

33 そして そのような たとえで、多くの 彼は話していた 彼らに 言葉を、
通りに 彼らができる 聞くことが。

34 だがたとえでなく 彼は話さなかった 彼らに、
だがひそかに 自分の弟子たちに 説明していた すべてを。

〔新共同訳〕

26 また、イエスは言われた。「神の国は次のようなものである。人が土に種を蒔いて、27 夜昼、

寝起きしているうちに、種は芽を出して成長するが、どうしてそうなるのか、その人は知らない。28 土はひとりでに実を結ばせるのであり、まず茎、次に穂、そしてその穂には豊かな実ができる。29 実が熟すと、早速、鎌を入れる。収穫の時が来たからである。」

30 更に、イエスは言われた。「神の国を何にたとえようか。どのようなたとえで示そうか。31 それは、からし種のようなものである。土に蒔くときには、地上のどんな種よりも小さいが、32 蒔くと、成長してどんな野菜よりも大きくなり、葉の陰に空の鳥が巢を作れるほど大きな枝を張る。」

33 イエスは、人々の聞く力に応じて、このように多くのたとえで御言葉を語られた。34 たとえを用いずに語ることはなかったが、御自分の弟子たちにはひそかにすべてを説明された。

①構成

26節は「神の国はそのようである」で始まり、30節でも「どのように神の国を私たちはたとえようか」で始まっているから、この箇所は「神の国」の何かの特徴を語っている。神の国についての二つのたとえによって、神の国がどのような現実であるかが示される。

①a 26—29節

主語の違いに注目して、たとえの構成を見ると、次のようになる。

a 「ある人が…投げる 眠って起きる」

b 「種は芽を出し…土は実を結ぶ」

c 「…彼は遣わす、収穫が来た」

a は、人間は「投げる」ことをしてしまうと、「眠って起きる」だけだと述べ、人間の無関与を強調している。b は、人間が「知らない間に」種は芽を出し、土は「おのずと」実を結ぶと述べ、「おのずと」を力説している。c は、人が鎌を遣わす「収穫」の時が来ると述べている。

①b 30—32節

このたとえの要点が、土の上に「蒔かれるとき」にはどの種よりも「より小さい」からの種が、いったん「蒔かれるとき」、どの野菜よりも「より大きく」なるという事実にあるのは明らか。

①c 33—34節

33節は「そのようなたとえで」で始まり、34節は「たとえでなく」で始まる。33節の二行目は、たとえの理解は聞く者の力に依拠していることを述べ、34節の二行目ではイエスが弟子にすべてを説明していたことを述べている。

②たとえの要点が示す神の国の特徴

②a 成長する種のたとえ（26—29節）

⑦このたとえは三つの段落に分けられるが、a はこのたとえの出発点であって、たとえの要点はここにはないだろう。なぜなら、人は種を「投げ」た後は、寝起きを繰り返すだけで、穀物の成長にはいっさい関与していないと述べるにすぎないからである。

④b では、種と土が主役である。ここに登場する人間は「どのようにしてか知らない」者にすぎないのであって、土は「おのずと」実を結ばせる。そしてこの「おのずと」を強調するため、「最初に…次に…次に…」と述べて、その成育過程を描く。人間の努力とは無関係に「お

のずと」実を結ばせる種と土の働きにスポットが当てられている。このbにたとえの要点があれば、種と土が「おのずと」実を結ぶように、神の国は「おのずと」成長し、実を結ぶと述べる。このたとえの目的になるだろう。神の国はまだ隠れているように見えるが、人間の理解を超えた仕方だ。「おのずと」成長して行くのである。

㊦ cの冒頭には「だが」が置かれている。これが28節以前に対して、29節を強調する働きをしているのなら、29節にたとえの頂点があることになる。人間はどのように実が熟すのかを知らないが、その収穫にあずかれる。cにたとえの要点があるとすれば、収穫の時が必ず到来するうちに、神の国は必ず完熟し、豊かな実りをもたらす、と述べる。これがたとえの目的となるだろう。

㊧ 「収穫」と訳されるセリスモスは、「収穫や刈り入れの作業・その時期」を意味する。この意味でこの話は神の国についてのたとえで使われる。動詞セリゾー（収穫する・刈り入れる）は神が終わりの日に行く裁きを表す。それに応じてセリスモスは、神の支配が完成する終末を表す。マタイ福音書の「毒麦のたとえ」の説明では、「刈り入れ」を「世の終わり」を示すたとえとしている（二三39）。マルコ4章26節以下も神の国についてのたとえであるが、ここでも、ヨエル4章13節「鎌を入れよ、刈り入れの時は熟した」を踏まえた、終末を示す語として使われている（29節）。

㊨ たとえの要点をbとcの両方に置くこともできる。神の国は「おのずと」成長するのであり、今は目立たなくとも、現在すでに始まっており、将来、それは必ず完成し、「収穫」の時を迎える。神の国の完成に向けて着実に働く神の力に信頼し、困難があつたとしても、今を力強く生きるべきである。

㊩ からし種のたとえ（30—32節）

㊰ このたとえでは、31節の「より小さく」と32節の「より大きく」が対比されている。「蒔かれるとき」が31節にも32節にも繰り返され、強調されていることから考えると、神の国はまだ取るに足らない小さなものであつても、すでに「蒔かれており」、始まっているとされているのだろう。

㊱ 神の国の最初は無に等しいものだが、やがて最も大きなものへと成長し、「その陰の下に空の鳥が住む」ほどのものに成長する。この句がエゼキエル17章23節を踏まえているなら、「空の鳥」とは異邦人の象徴である。神の国は異邦人も含むほどに大きく広がって行く。

㊲ たとえで語る（33—34節）

㊲ 33節と34節共に、冒頭には「たとえで」という句が置かれている。神の国は「たとえで」しか語ることができないのは、それが人間の理解を超えた現実だからである。

㊳ 33節二行目の「彼らが聞くことができた通りに」は、一行目の「たとえで話した」にかかっている。イエスは人知を超えた神の国を説明するためにはたとえを使わざるを得ない。しかし、たとえが指し示す神の国をどこまで理解できるかは、聞く者の姿勢にかかっている。神の言葉に心を開く自由さを持つていれば、たとえが示す神の国を生き生きと捉えられる。しかし、自分の既成の考え方に捕らわれ、神の言葉への敏感さを欠くなら、たとえは不可解なものに終る。そこで、「彼らが聞くことができた通りに、たとえで話した」と述べ、聞く者の姿勢に応じてたとえは理解されざるをえないことを明らかにしている。

③たとえ（パラボレー）

前置詞パラ（わきに・傍らに）と動詞バツロー（投げる・置く）との合成動詞パラバツロー（わきに置く・並べる・比較する）から派生した名詞。「並べること・比較」が基本的な意味。新約聖書には50回の用例があり、ヘブライ人への手紙で2回使われるほかは、すべて共観福音書で使われる。用法は二つに大別できる。

①ヘブライ人への手紙では、「ある別のことから象徴するもの・原型」を意味する。聖所への道が開かれていない「第一の幕屋」と「今の時代」が比較されて、第一の幕屋が今の時代を指し示す「パラボレー（原型）」であり（ヘブ9・9）、いけにえに献げたイサクをアブラハムが神から返してもらった出来事は、死者からの復活を表す「パラボレー（象徴）」だとされる（ヘブ11・19）。

②共観福音書では、「格言・箴言」や（マコ7・17、マタ15・15）、「ことわざ」を意味することもある（ルカ4・23）。だが、ほとんどは「たとえ」の意味であり、あることがらを説明するために、それと似たところのある、身近な物事を引き合いに出す話し方を表す。

③たとえを用いるのはイエスの教えの特徴である。イエスのたとえで主題となるのは、神の国の到来、大宴会への招待、命令になつた正しい行動の取り方、終末における裁き、罪人の悔い改めに対する神の応答などである。

④たとえにはさまざまな人物や事物が登場するのが普通である。たとえの意味について、イエス自身が説き明かすこともあるが（マコ4・13以下と並行箇所、マタ13・36以下）、たとえの聞き手が読み取らなければならないことが多い。イエスのたとえを聞いた弟子や人々は、その意味を尋ねることになり（マコ4・10、ルカ8・10）、イエスのたとえは聞き手の能力に応じて理解されることになる（33節）。たとえが弟子たちには神の国の秘密を打ち明けるものとなるが、外の人々にはまったくの謎の言葉になるのも（マコ4・11と並行箇所）、そのためである。ギリシア語訳旧約聖書は、この語を様々な語や表現を表すのに用い、「謎」の意味でも用いていた。

④神がもたらす実りを信じて働く

①神の国（支配）は人間の努力がなくても「おのずと」完成に向つて成長し、「空の鳥」が巢を作つて住むほどに大きなものとなる。「おのずと」（アウトマトス）は「目に見える原因もなく」といったことを表す。作物が成長するのは目に見えて分かる。しかし、「どうしてそうなるのか」は分からず、まさに「おのずと」に育つかのように見える。もちろん、ここでの「おのずと」の背後では神が働いている。しかし、神の働きは「目に見えるものによらず、信仰によって」認知される。従つて、人の目にとつては、「おのずと」と映ることになる。

②イエスはたとえによつて、目に見える現実の奥に、確かに始まっている神の国の現実を指し示す。現状はいかに取るに足らないように見えても、そこには神の力が働いている。それは成長して、全世界を包み込むような豊かな実りをもたらす。弟子たちが信頼を置くべきなのは、自分の力ではなく、この目には見えなくても、何よりも力の強い神の働きである。

③二つのたとえの中心は、神への信頼を呼びかけることにある。農夫は種の成長の秘密を知らないし、刈り入れの時を思うままに操作することもできない。けれども、不安に脅えることも、思い煩うこともしない。実りを信頼して、農作業を続ける。神の国も同じである。それは目にも見え、計算もできない。しかし、確実に進展していく。神の国をもたらすのは人の働きではなく、神の働きである。農夫を見れば、誰に信頼をおくべきかを理解することができる。